

Z301r 地震の歴史をまなぶ- 歴史地震研究の現在

加納靖之（東京大学）

過去に発生した地震のうち、歴史時代に発生したものを「歴史地震」とよび、これを対象としているのが「歴史地震学」となる。史料（歴史資料）を分析して地震に関する知見を得ることに着目して、「史料地震学」ということもある。考古学や地質学あるいは地形学などの知見から、歴史時代より前の地震について調べることもでき、それらも含め「古地震」と総称する。被害を生ずるような大地震の頻度は小さく、地震計などによる近代的観測の開始以前に発生した地震の様相を知ることが、地震そのものやその発生メカニズムを知り、将来の発生を予測するために重要である。地震が発生した際に過去の例を振り返ることは、近代以前から行われており、近代以降も地震学の一分野として研究が継続されている。歴史地震研究においては、地震動や津波、また、それらによる被害等の程度や分布を史料の記述から推定し、それを引き起こした地下での地震現象を明らかにする。その基盤として、地震に特化した史料集や、歴史地震のカタログが編集、刊行され、研究に供されてきた。そして、新たな史料の発見や、既知の史料の再分析、あるいは現代の地震学の知見の適用により、歴史地震についてより正確で詳細、精密な理解をすすめる段階となっており、歴史学をはじめとする関連する諸分野の研究者との連携がますます必要となってきている。

本発表では、関連するデータベースの電子化、オープン化、市民の参加を得て史料を解説する「みんなで翻刻」、地震学、天文学、気象学・気候学などと歴史学との協働を目指す「歴史学×地球惑星科学」などのプロジェクトや、「歴史ビッグデータ」や「タイムマシン」といったキーワードにも触れながら、歴史地震研究の現在について報告する。